

はじめの一步

テクニカル分析

ハンドブック3 (初級編②)

TECHNICAL ANALYSIS



NTAA[®]
The Nippon Technical Analysts Association

国際テクニカルアナリスト連盟 (IFTA) 加盟
日本テクニカルアナリスト協会[®]
特定非営利活動法人 (NPO 法人)

はじめに

本小冊子は、前号「はじめの一步 テクニカル分析 ハンドブック2(初級編①)」に続いて、テクニカル分析とは何かについて、さわりの部分の続きをお話します。

テクニカル分析には様々な手法がありますが、ここではオシレーター分析、サイクル分析、出来高分析、フォーメーション分析、その他の手法についてご紹介します。

投資手法には順張りとは逆張りがあります。順張りは価格推移のトレンドに沿ってポジションを持つ方法、逆張りはトレンドが反転することを前提として、トレンドと反対方向にポジションを持つ方法です。テクニカル分析には、順張り、逆張りそれぞれに適した手法があり、用途に合わせて使い分けます。

また、コンピューターの普及により、テクニカル分析がどのように変化したか、ロケット・サイエンティストとはどのような人たちかという話もご紹介します。

本書をご覧になることにより、投資家が何を考えてテクニカル分析を考案したのか、テクニカル分析とはどういうものかについて、興味を持っていただくきっかけとなれば幸いです。私たち日本テクニカルアナリスト協会が推進している「テクニカル分析」は、皆さんの資産運用の一助になることを確信しています。

Introduction

目次

A	テクニカル分析のBCとAC	3
	1. BC時代のテクニカル分析	3
	2. AC時代のテクニカル分析	4
B	オシレーター分析	6
	1. 順張り投資	6
	2. 逆張り投資	8
	3. オシレーターとは	10
	4. スイングトレード	11
	5. オシレーターの種類ーRSI	12
	6. オシレーターの種類ーストキャスティクス	14
	7. 両方の性質を持つ分析手法	15
	8. ボリンジャーバンド	16
C	サイクル分析	18
	1. サイクル分析の発展	20
	2. ロケット・サイエンティスト	22
D	出来高分析	23
	1. 需給分析	24
	2. 逆ウォッチ曲線	25
	3. 高頻度売買(HFT)の影響	26
E	フォーメーション分析	27
	1. 日本のフォーメーション分析	28
	2. 海外のフォーメーション分析	30
F	一目均衡表	32

A

テクニカル分析のBCとAC

キリストの誕生を境として西暦をBCとACに分けることがあります。テクニカル分析でもBCとACがあります。テクニカル分析の場合、CはキリストのCではなく、コンピューターのCです。Before Computer、After Computerというわけです。

米国のApple社が、初めて個人でも買えるコンピューターとして「Apple I」を発表したのは1976年だそうです。しかし、本格的な普及期に入るのは海外ではIBMがmodel 5150を発表した1981年以降、日本ではNECがPC-9801を発表した1982年以降のことです。おおむね1980年頃がBCとACの境となります。

1. BC時代のテクニカル分析

コンピューターが普及する前、つまりBCの時代では、複雑な計算も手で計算するか、計算尺を用いる程度しか方法はありませんでしたから、テクニカル分析は時間と労力のかかる分析手法でした。

また、あるシグナルが出現した後の株価推移がどうだったのかは、チャートを目で追ってシグナルを抽出し、それを元に騰落を計算、集計していました。そのため、

無意識のうちに、目立つシグナルや結果が都合の良かったシグナルをピックアップしてしまうこともあったかもしれません。

BCの時代に考案された伝統的手法を、コンピューターを使って検証してみると、中には有効だと思っていたものが単なる思い込みであったり、後付け講釈であったり、あるいは客観的な有効性を持たない場合も含まれていることが分かってきました。

2. AC時代のテクニカル分析

現在はACの時代ですが、家庭用のPCでも複雑な計算ができるようになり、検証に使う過去の価格データもインターネットなどからだれでも入手できるようになりました。だれでもその気さえあれば、あるシグナルが本当に有効かどうか調べることができ、独自のシグナルを考案することも可能になりました。コンピューターの普及により、テクニカル分析はだれでも利用できる手法になったといえます。

一方、行動経済学では、買った株が値下がりして評価損となってしまった場合など、状況によって投資家は

合理的な投資判断をするとは限らないということが指摘されています。評価損とは、その時点の市場価格で反対売買をして決済すると損が出てしまう状態のことです。投資の管理には、何らかの判断支援ツールが必要なようです。

テクニカル分析手法は万能ではありませんが、全く効果がないわけでもありません。また、多くのシグナルは、特定の条件下でのみ効果を発揮するようです。これらのことを総合すると、投資に必勝法はなく、確率の高い方に賭けるしか方法がないと考えた方が良さそうです。その時、転ばぬ先の杖となる1つがAC時代のテクニカル分析だろうと思います。



B

オシレーター分析

オシレーター分析を理解するには、まず順張りとは逆張りを理解した方が良いでしょう。トレンドの方向に沿う投資をする手法を順張り投資、略して順張りといいます。一方、トレンドが反転することを前提として、トレンドと反対方向に投資をする手法を逆張り投資、または逆張りといいます。

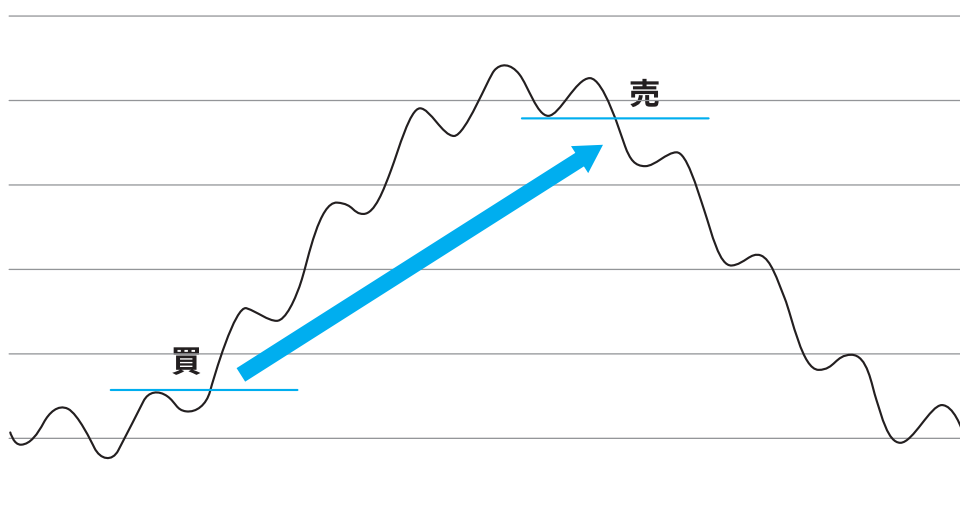
1. 順張り投資

上昇局面では、初期の価格が低い時に買い、末期の価格が上がった時に売って利益獲得を目指します。下降局面では、初期の価格が高い時に空売りし、末期の価格が下がった時に買い戻して利益獲得を目指します。価格推移の方向に沿ったポジションを持つのでだれにでも分かりやすく、投資の初心者にも向いているとされています。

この投資手法は、投資した後も同じトレンドが続くことを前提としており、価格変化が大きいほど利益も大きくなります。反面、投資した後すぐにトレンドが反転すると利益を確定するチャンスがなく、損失となる場合もあります。

順張り投資に使うテクニカル分析はトレンド分析ですが、トレンド分析の売買シグナルは、新しいトレンドの発生を確認してから出るように設計されています。このため、価格推移の方向転換よりも、シグナルの点灯時期は大なり小なり遅れるのが普通です。

したがって、順張り投資は、投資期間が数週間以上の中期～長期投資に向けた手法になります。



順張り投資は大きなトレンドを利用する

2. 逆張り投資

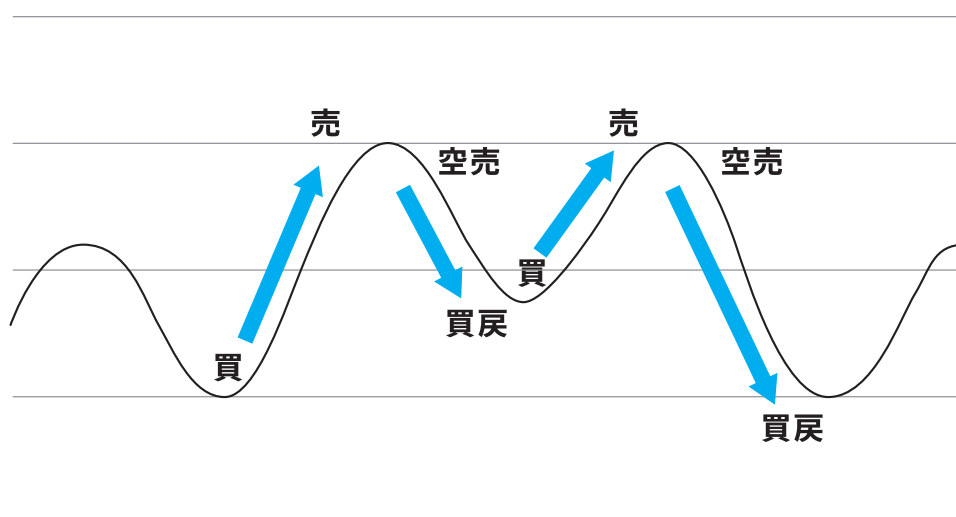
トレンドが上昇に転じた後は、多くの投資家が買い注文を出すので、希望する価格よりも高い価格でないと買えないということがしばしば起こります。また、下落に転じた後は、多くの投資家が売り注文を出すので、希望する価格よりも低い価格でないと売れないということも良く起こります。これらは、軽視できない投資収益の悪化要因となります。

トレンドの転換を他人より早く察知できれば、このような不便を避けられます。そこで、トレンドが反転したら、なるべく時間差なく行動を起こすという逆張りの発想が生まれました。価格が上昇トレンドから反落に転じたことを察知すれば、すぐさま買いを手じまい、下降トレンドから反騰に転じたことを察知すれば、すぐに買い建てます。多少のフライングはいといません。

逆張り投資に使うテクニカル分析はオシレーター分析ですが、オシレーター分析は小さな反転も敏感にとらえる性質があります。このため、オシレーター分析の売買シグナルにはだまし(結果的に収益機会がなかったシグナル)も多くなります。

逆張り投資で利益を上げるには、マーケットを熟知していてオシレーターのシグナルがだましかどうか判断できる経験が必要です。また、大きく利益が出る投資は回数が少なく、損切り(損失を計上して手じまうこと)は

多くなりがちなので、強い精神力が求められます。投資期間は数日程度の短期投資に向けた手法になります。投資期間が短いということは、年間の売買回数は多くなりやすいということにつながります。売買回数が増えると、投資1回当たりの利益は小さくなる一方、手数料などの売買コストは変わりませんから、逆張り投資は順張り投資よりも収益性が劣る可能性が高いといえます。加えて、逆張り投資では見込み違いによる損切りも多く発生するので、順張り投資よりも収益とリスクをきめ細かく管理する必要があります。逆張り投資が熟練者向きとされる大きな理由の1つでもあります。



逆張り投資は細かいトレンドを拾う

3. オシレーターとは

オシレーターとは、振り子の錘のことです。振り子は鉛直を中心として往復運動をしますが、このように、ある値に回帰する性質を持つ指標をオシレーターと呼び、オシレーターを使う分析手法をオシレーター分析といいます。

価格が上昇傾向の時は、価格は前日比プラスのことが多く、価格が下落傾向の時は、価格は前日比マイナスのことが多くなります。このことから、前日比の騰落がマイナス傾向からプラス傾向に転じた所が相場の底であり、プラス傾向からマイナス傾向に転じた所が相場の天井であることが分かります。

オシレーターは、このような点に着目して価格の反転を捉えます。オシレーターには一定の範囲で往復運動をするものと、範囲に限界がないものがありますが、使い勝手を考えると、一定の範囲で往復運動をする指標の方が便利です。限界値に接近すれば、反転するタイミングが近づいていると予想できるからです。

そこで、オシレーターが上限に近づいたら買いを手じまい、オシレーターが反転したら売り建てることもできます。反対にオシレーターが下限に近づいたら売り建玉があれば手じまい、オシレーターが反転してから買建てます。

ただ、強いトレンドが発生すると、オシレーターは往復

運動をせず、片側に張り付いてしまうことが良くあります。これがオシレーターのダマシ(投資収益に結びつかない売買シグナル)で、初心者向きでない理由です。

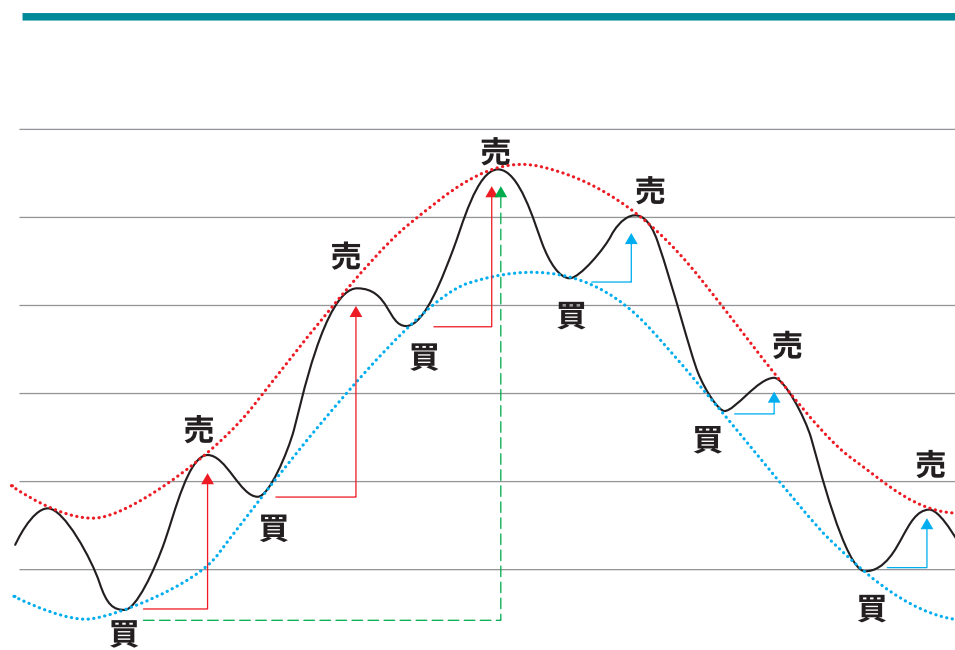
4. スイングトレード

上昇局面でも下降局面でも、価格推移は一直線に進むのではなく、短期の上下動を繰り返しながら推移します。上昇局面全体での上昇幅は、短期上昇幅の合計から短期下落幅の合計を引いたものですから、理屈の上では、短期上昇をすべて捨てる方が、利益総額が大きくなります。

また、下降局面であっても短期の上昇が含まれているので、買いで利益を上げることができるはずです。このような投資にもオシレーターは適しています。

このような投資手法を「スイングトレード」といいます。この手法の欠点は、売買回数が多くなるので手数料がかさみ、投資収益を圧迫することです。しかし、手数料の低いネット取引の普及で、個人投資家でも実行可能な手法になりました。とはいうものの、熟練者向きの手法であることに変わりはありません。

Oscillator



赤線の合計は緑線より大きくなる

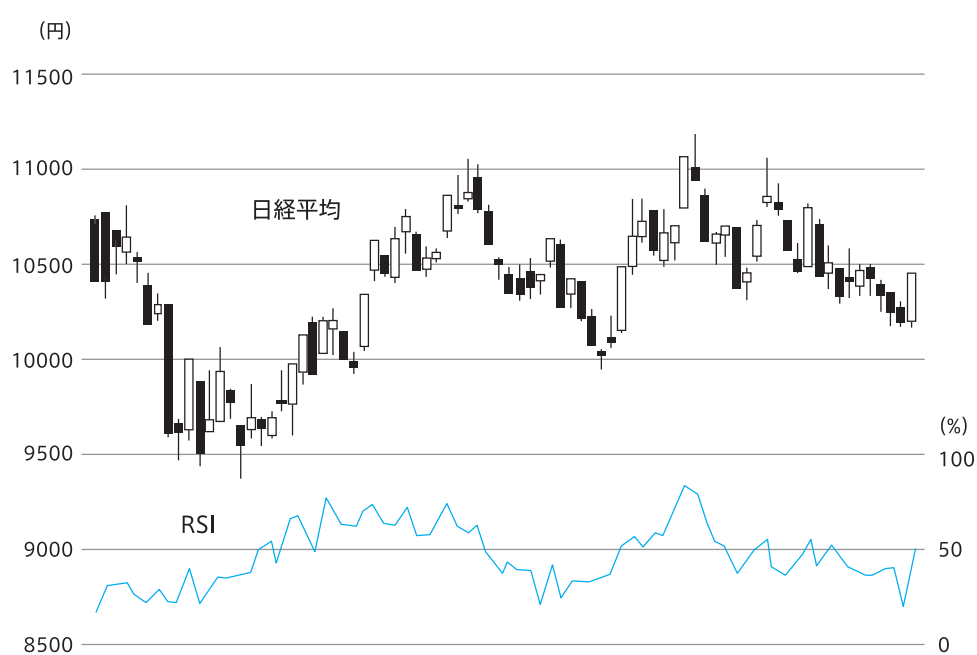
5. オシレーターの種類 - RSI

RSIは、相対力指数とも呼ばれ、J・ウェルズ・ワイルダーが考案しました。ワイルダーは様々な指標を考案し、1978年に「New Concepts In Technical Trading Systems」という本で発表して好評を得ました。

RSIは、一定期間における日々の前日比騰落値幅のうち、上昇値幅の合計はどれだけあったかという比率を計算しています。

したがって、計算期間中ずっと上昇が続けばRSIは100に、下落が続けば0になります。しかし、通常はそのような

一方的な展開にはならないので、100か0に接近すれば反転が近いと判断します。また、高水準や低水準が続けば、強いトレンドが発生していることが分かります。



日経平均(日足)とRSI

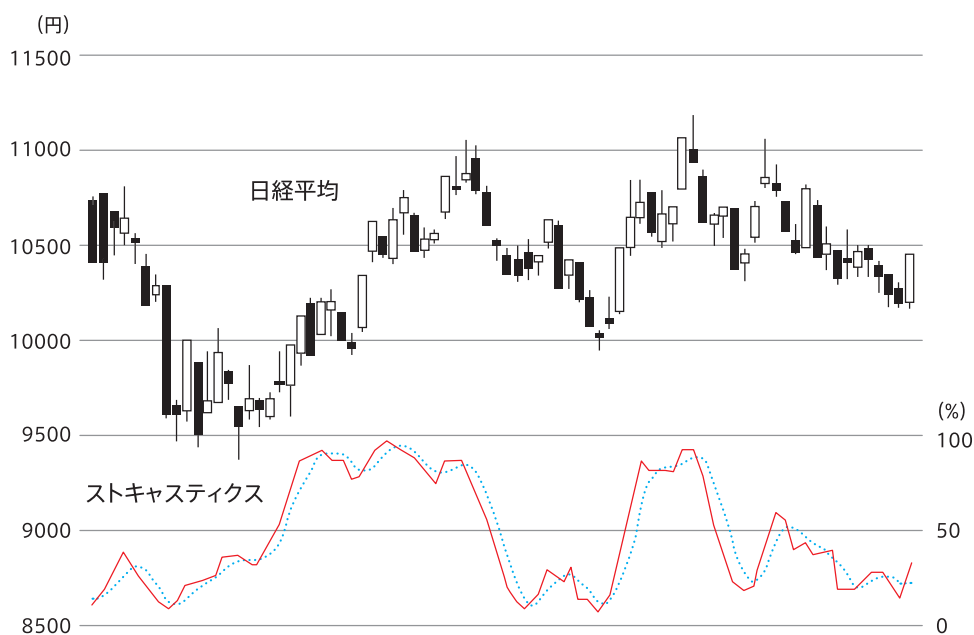


6. オシレーターの種類 ー ストキャスティクス

ストキャスティクスは、C.ラルフ・ダイスタントが経営する投資教育学校の講師チームが考案し、1957年にジョージ・レーンが発表しました。

ストキャスティクスは、一定期間における最高値と最安値の中で、直近終値が最安値からどれだけ上の位置にあるかという比率を計算しています。

したがって、計算期間中ずっと新高値が終値となる日が続けばストキャスティクスは100に、新安値が終値となる日が続けば0になります。しかし、通常はそのような一方的な展開にはならないので、100か0に接近すれば反転が近いと判断します。また、高水準や低水準が続けば、強いトレンドが発生していると判断します。



日経平均(日足)とストキャスティクス

7. 両方の性質を持つ分析手法

トレンド分析の指標は、短期の価格変化を排除して大勢を抽出するように作られており、トレンドが明確な場合に使います。一方、オシレーターは、トレンドを排除して短期変動を抽出するように作られており、トレンドが明確でない場合に使います。それぞれを反対の局面で使うと、ダマしの売買シグナルが多くなり、損失を被ることが少なくありません。

現実の相場では、トレンドは上昇下降にかかわらず強くなったり弱くなったり、あるいは不明確になったりするので、どちらにも対応できるように、トレンド分析とオシレーター分析の両方を常にチェックする必要があります。

ところが、中にはトレンドが発生していればトレンドの方向を示唆し、トレンドが転換すればそれを示唆するという、両者の性質を持つ手法があります。これらの指標では、トレンドの強弱や有無を気にする必要がなく、1つの手法でトレンドに追随する順張り投資にも、転換点を捉える逆張り投資にもどちらにも使えるので人気があります。代表的なものが、次項で紹介するボリンジャーバンドです。

8. ボリンジャーバンド

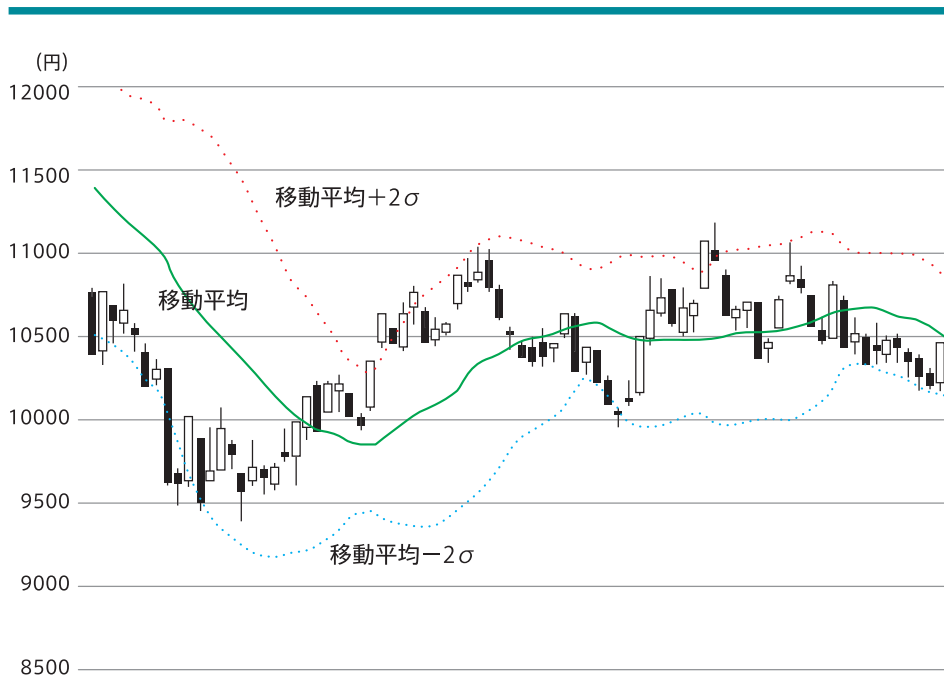
ボリンジャーバンドは、米国のジョン・ボリンジャーが1990年頃に発表した方法です。株価は移動平均値を中心としてその上下に正規分布すると考え、株価の標準偏差を求めます。そして移動平均線に標準偏差の2倍の値を加算した補助線と減算した補助線を引きます。理論的には2本の補助線の間約96%の株価が入ります。

通常相場であれば、株価は移動平均線を中心として推移し、下の補助線に接近もしくは割り込んだら反騰に転じ、上の補助線に接近もしくは突破したら反落に転じます。この場合、株価が補助線の近くで方向転換することを前提として投資を行うこととなりますが、これはオシレーター的な使い方といえます。

一方、長期間上昇もしくは下降が続いた後は、2本の補助線の間隔が狭くなり、その後トレンドが反転すると、片側の補助線を押し広げるように推移することがあります。この場合には、株価の推移に追随する投資を行います。新しいトレンドの発生が示唆されるからで、これはトレンド指標としての使い方といえます。

ボリンジャーバンドは、移動平均線を応用した手法なので、トレンド分析に含められることがあります。

Oscillator



日経平均(日足)とボリジャーバンド



Cycle analysis

C

サイクル分析

景気に好不況の循環があることは良く知られています。景気が良くなれば企業業績が好転し、景気が後退すれば企業業績も減退します。株価は企業業績に連動しますから、景気上昇期には株価が上昇し、景気後退期には株価が下落する傾向となります。株価は景気循環に呼応して上下する周期性を持っていると考えられます。アイスクリームやキャンプ用品などは夏に売り上げが伸び、冬は低迷しそうです。反対に厚手のコートやウィンター・スポーツ用品などは冬に売れ、夏には売れそうもありません。このように、事業内容によっては企業業績に季節性が生じ、株価変動にも季節性が生じる場合があります。

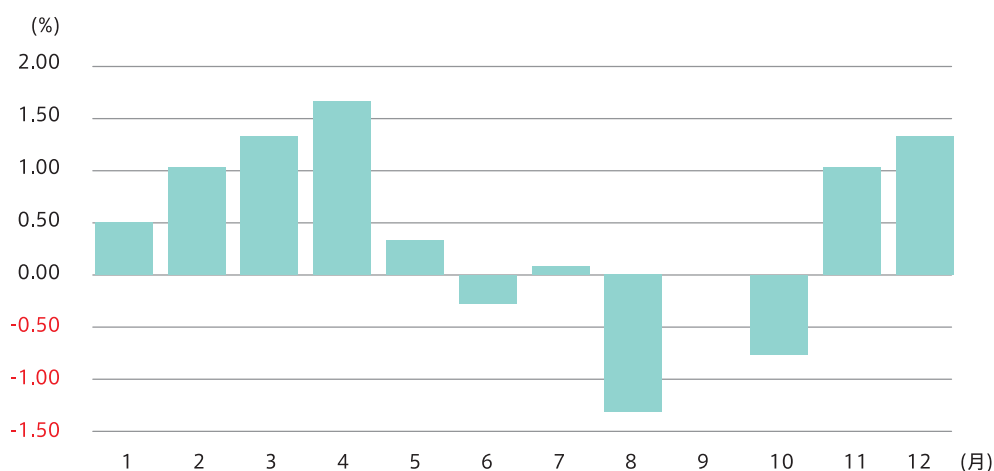


日経平均は景気拡大期に上昇しやすい
(着色縦帯は景気循環日付に基づく景気拡大期)

トレーダーは、週末を心安らかに過ごしたいので、金曜日にポジションを整理して売却するので株価が低迷しやすく、週明けにはポジションを再構築するために買うので株価が下がりにくいといわれます。同じ様なことは月末や月初、年度の期末や期初にも行われるので、価格は投資家の行動による周期性を持っている可能性があります。

株価に限らず、いろいろな金融商品で同じようなことが起こり、相互に影響しあいますから、価格推移は様々な要因で生じた周期性を持っていると考えられます。その周期性を知ることができれば、安い所で買って高い所で売るのは難しくないかもしれません。

そこで、価格推移を研究して特徴的なサイクルを抽出し、投資タイミングを知ろうとするのがサイクル分析です。



日経平均は4月に上昇しやすい(過去30年間の平均)

1. サイクル分析の発展

価格変化を「波」の動きになぞらえたのは、日本では本間宗久、米国ではチャールズ・ダウが最初と考えられていますが、いずれも「波」をトレンドとして捉えていました。価格変化に周期性があるのではないかと考えて詳しく研究したのは、米国のウォルター・ブレザートが最初です。1970年代に研究を進めて1981年に「The blue book : How to use cycles with an overbought/oversold index and a momentum index for more consistent profits」を出版しました。

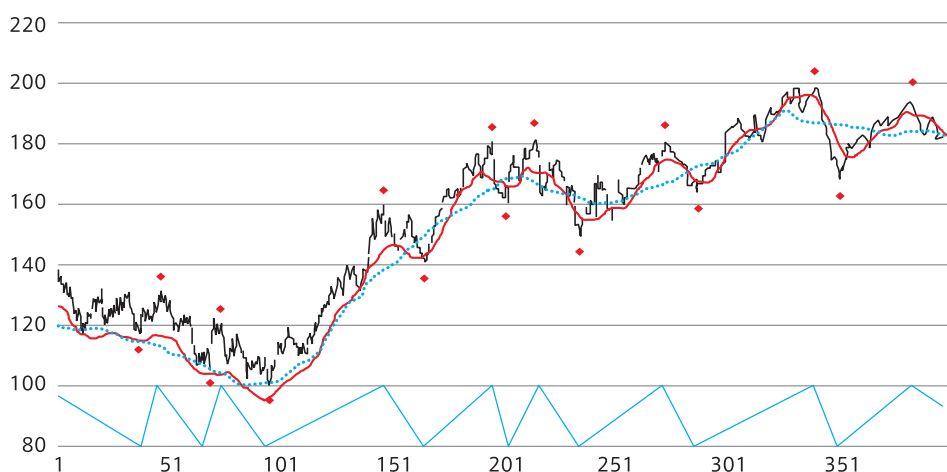
ブレザートは、価格推移の節目となる底から次の節目となる底までを1つのサイクルと考え、オシレーターを用いてサイクルの天底を判定する手法を考案しました。

彼の考えでは、市場、投資対象、日足、週足などの時間の単位に関係なく、足の本数で14~25本の周期があり、それぞれのサイクルは2つの小サイクルで構成されます。

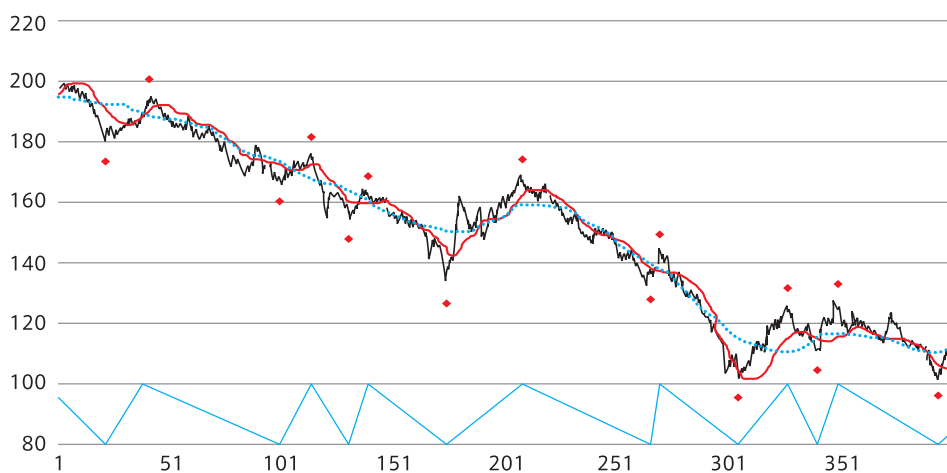
また、上昇局面ではサイクルの最初から約3/4の期間が上昇で、最後の約1/4の期間が下落となり、天井がサイクル全体の中央よりも右側に偏る右方偏移が起ることを発見しました。下降局面では反対に、サイクルの最初から約1/4の期間が上昇で、残りの約3/4の期間が下落となり、天井がサイクル全体の中央よりも左側に偏る左方偏移が起ることも発見しました。

その後、米国のレイモンド・メリマンが、メリマン・サイク

ルを考案しました。1996年に邦訳本が出てからは、日本でも知られるようになりました。メリマン・サイクルは、占星術とサイクル分析を融合した独特のマーケット分析で、占いを信じるか否かは人それぞれですが、こと相場に限って言えば、占いと分析は区別して考えた方が良くもかもしれません。



上昇局面では天井がサイクルの中心より右にずれる



下降局面では天井がサイクルの中心より左にずれる

2. ロケット・サイエンティスト

その後、物理学者がマーケットの分析を行うようになり、サイクル分析は大きく変化しました。

月へ有人宇宙船を送るアポロ計画が1972年に終了した際、NASA-米航空宇宙局は大量の科学者を解雇しました。その時彼らの一部がウォール街に転職しました。物理学には音声や電波、流体力学など様々な波動の研究があり、これらの知識を応用して新しい分析手法や投資手法が彼らによって考案されました。

新しい手法は一般に金融工学と呼ばれ、金融工学を研究する人をクオンツと呼びます。しかし、米国では時としてロケット・サイエンティストと呼ばれるのはこのような経緯があるためです。



D

出来高分析

出来高は、需要と供給を反映しているといわれています。価格が上昇してくると、より上昇することを期待して買い注文が増えると同時に、利益確定の売り注文も増えて出来高は増加します。

反対に価格が下落してくると、ポジションを解消しようとする売り方の注文は増えますが、買い方は下げ止まるまで様子を見ようとして買い注文は減少します。下落の途中で買えば、買った途端に含み損を抱えることになりかねませんし、買いコストはできるだけ安い方が収益を得やすいからです。買い注文が減少すれば、売り注文が多くても少ない方の数量しか約定しませんから出来高は減少します。

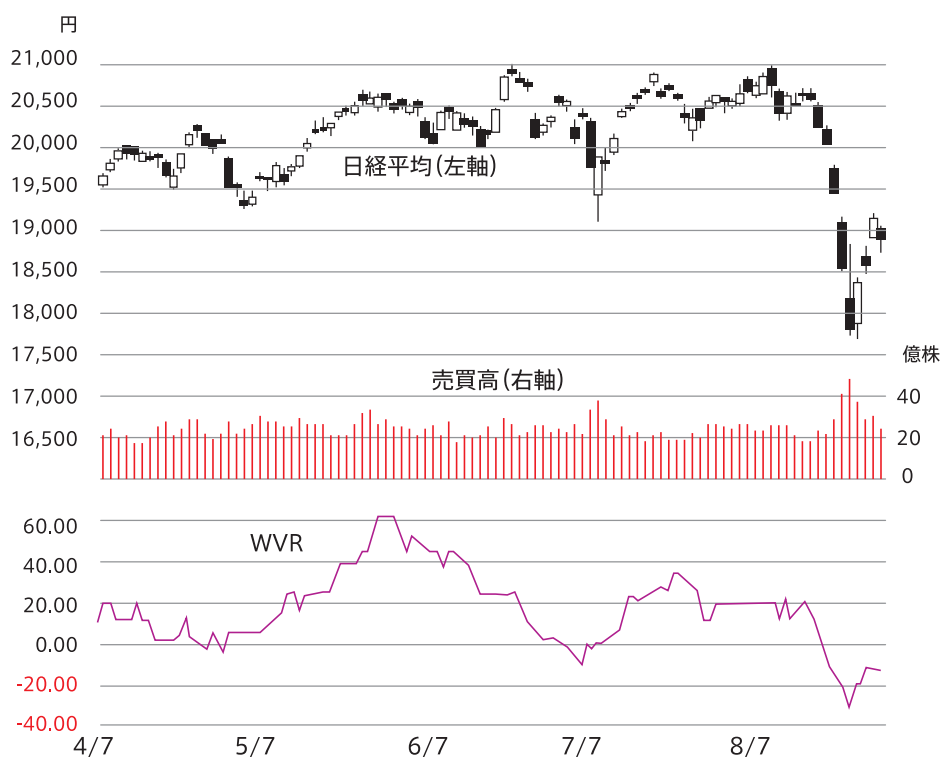
このように、出来高は買い注文の増減に応じて変化すると考えられ、その背景には買い手の思惑があると予想されます。そこで、出来高の増減を価格推移の傾向と合わせて観察し、マーケットの価格上昇期待の強弱を探ることで、価格の将来動向を予測しようとするのが出来高分析です。

ところで、出来高は約定した数量のことで、株式の場合は売買高と同じです。しかし、商品先物では売買高は買い数量と売り数量の合計で、出来高の約2倍の値になります。出来高の方が誤解は少なそうです。

1. 需給分析

価格が前日比で上昇した日の出来高は買い手(需要)によるもの、前日比で下落した日の出来高は売り手(供給)によるものと考えます。日々、需要による出来高を加算、供給による出来高を減算して累積したり、一定期間の需要による出来高計と供給による出来高計の比率を求めるとして、その推移を分析します。

一般的に、上昇局面では数値は増大傾向となり、下降局面では数値は減少傾向となりますが、転換点の手前で変化が表れて予兆となる場合があります。



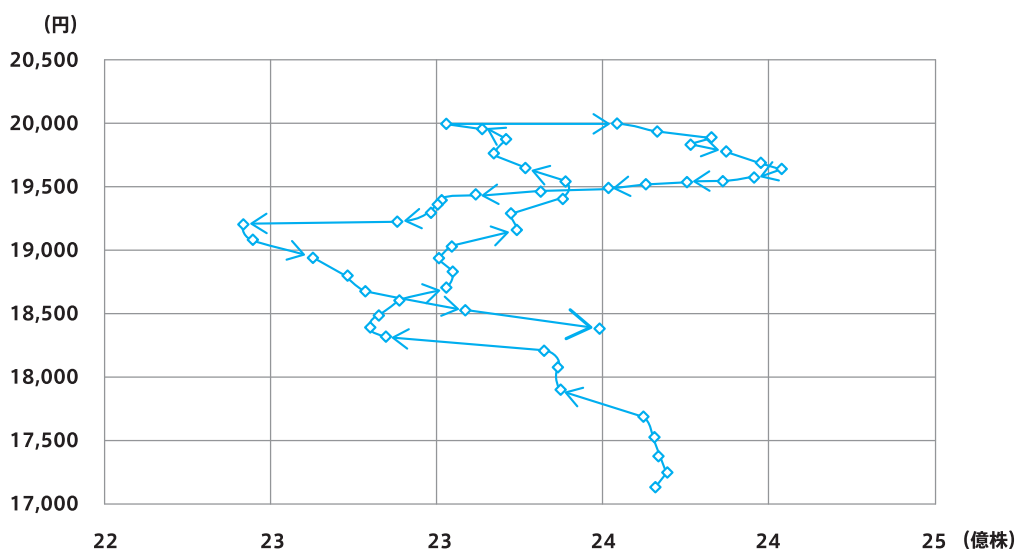
需要分析(ワコーボリュームレシオ)

2. 逆ウォッチ曲線（需要曲線）

縦軸を価格、横軸を出来高としてグラフを描くと、次の8ステップで推移する反時計回りの線となります。

- ① 価格は低位横ばいだが、出来高が増え始める。
- ② 価格は上昇し、出来高は増加する。
- ③ 価格は上昇するが、出来高は伸び悩みとなる。
- ④ 価格はまだ上昇するが、出来高は減少し始める。
- ⑤ 価格は高値横ばいだが、出来高は減少する。
- ⑥ 価格は下落し、出来高は減少する。
- ⑦ 価格は下落するが、出来高は低位横ばいとなる。
- ⑧ 価格はまだ下落するが、出来高は増え始める。

実際には円形にはならず、長い上昇局面では右上へ、長い下降局面では左下へ引き伸ばされた形になります。これは、上昇局面では出来高が増加し、下降局面では出来高が減少するためと考えられます。



日経平均週足の逆ウォッチ曲線

3. 高頻度売買（HFT）の影響

もともと、現在ではコンピューターを用いて1/1000秒単位で売買を行うHFT(High Frequency Trading=高頻度売買)の市場関与率が高くなってきています。HFTはコンピューター・プログラムに基づいて売買が行われ、小さな値動きから小幅の利益を取る売買が繰り返されるので、投資家心理や需給関係は反映されていないと考えられています。

そのため、大型株や主力銘柄では出来高分析が通用しないケースが増えてきました。しかし、東証マザーズ市場の銘柄など、小型で流動性の低い銘柄ではHFTの関与率は低いと言われており、出来高分析の有効性がまだ期待できると考えられています。



E

フォーメーション分析

価格推移の大勢が大天井をつけたり大底をつけたりして方向転換する時の価格推移には類型があり、現在までの価格推移の大勢から今後の展開を予測しようという手法があります。フォーメーション分析、あるいはパターン分析ともいいます。

大きな好材料が出れば、株は買われて上昇しますし、悪材料が出れば売られて下がります。価格が大きく動けば、買い手や売り手の投資判断や投資家心理に影響を与え、それに応じた投資行動が起こります。

投資家心理は、銘柄や時代、人が変わっても、大きくは変わりませんから、ある特徴的な価格推移が起こった後の相場推移は、過去の類似例に似た歩みになるかもしれません。これが、フォーメーション分析のコンセプトです。

しかし、価格推移の結果パターンが形成されるか否か、パターンが形成されたならどれに該当するかは、すべてが終わった後でしか分かりません。したがって、価格推移の途中で、ある特定のフォーメーションが形成されるものと期待しない方が良いでしょう。

フォーメーション分析の基本的な使い方は、将来の価格推移として可能性があるものを複数、事前に想定して、どのようなシグナルが出た時にどのような決断をすべきか、投資のシミュレーションをすることです。あら

ゆる場面を想定して心の準備をしておくことで、どのような相場展開にも慌てず対処することができます。

1. 日本のフォーメーション分析

フォーメーション分析に関する最も古い記述は、1890年に武藤信吉が出した「米商必携出世の鏡」でしょう。その中で「相場の高下を前知せんとするには前々の相場の足取を見定め置是迄の高下に照し潜思熟考会心の所に至りて売買仕掛かる事肝要ならん」と述べ、相場の先行きを予測するには、過去のチャートと直近の騰落を比較してよく考えることが大切であると指摘しています。

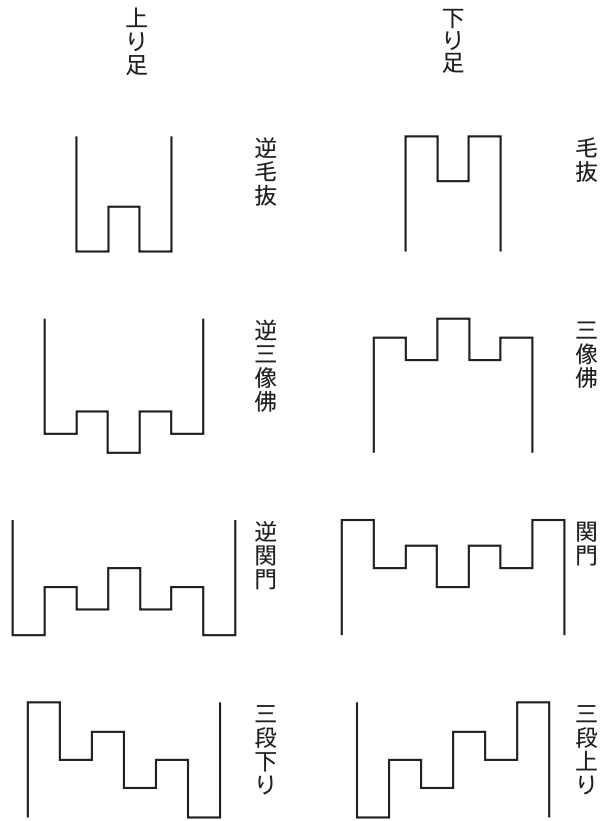
上り足
下り足

逆毛抜
毛抜

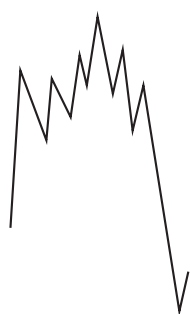
逆三像佛
三像佛

逆関門
関門

三段下り
三段上り



一方、図に示したものでは、1901年に青木伝吉が出した「著者実験定期売買之秘伝」があります。そこには天井をつけて下落に転じるフォーメーションとして「毛抜」「三像仏」「関門」「三段上り」、底を打って上昇に転じるフォーメーションとして「逆毛抜」「逆三像仏」「逆関門」「三段下り」が、広く一般に信じられていると紹介しています。



天井極りて
下に向かう



底極りて
起き上がる



陰の満玉
陽の三玉



一陰一陽



下げの内
の上げ



天井保合

本間宗久が用いた罫線形式(フォーメーション分析)とされる図

早坂二菊「相場罫線術講義」1904から一部を抜粋

チャートの時間軸は右から左

2. 海外のフォーメーション分析

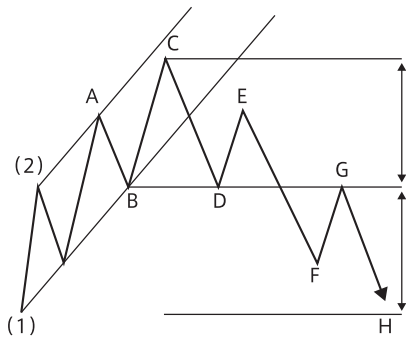
海外では、米国のロバート・エドワーズとジョン・マギーが1948年に出した「株価トレンドのテクニカル分析」が最初でしょう。ダウ理論、トレンドライン、フォーメーション分析について、理論と実践を解説した本で、現在でも新しい知識に基づいて加筆訂正が行われ、改訂版が出ています。

ここで紹介されているパターンには、ヘッド・アンド・ショルダーズ(三尊)、三角持合、レクタングル(揉み合い)、トリプル・トップ、ダブル・トップ、ブロードニング、フラッグ、ウェッジ、ギャップ(窓)などで、現在知られているフォーメーションは、ほぼすべて網羅されています。

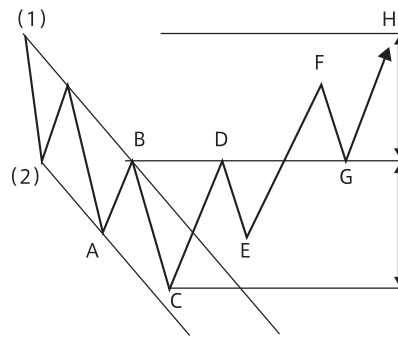
日本では大勢反転のフォーメーションが重視されているのに対し、米国では大勢転換に加えて、中段揉み合いのフォーメーションも多いのが特徴的です。



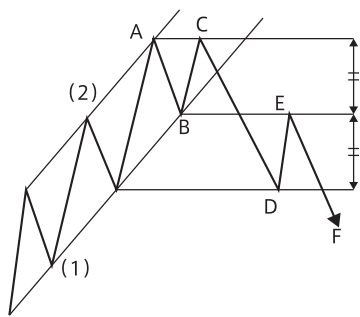
主なフォーメーションの種類



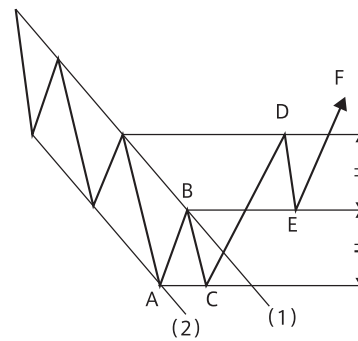
ヘッド&ショルダーズ・トップ



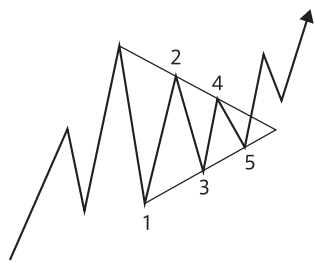
ヘッド&ショルダーズ・ボトム



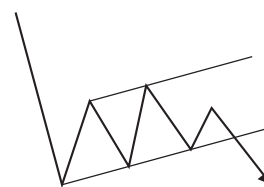
ダブル・トップ



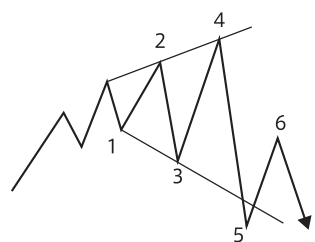
ダブル・ボトム



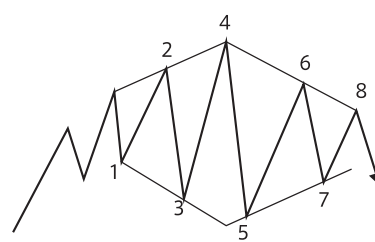
トライアングル



フラッグ



ブロードニング



ダイヤモンド

都新聞の商況部長であった一目山人こと細田悟一氏が、昭和初期にまとめた相場理論です。延べ2,000人ともいわれる学生アルバイトを使って相場の周期性、変化率などを調査してまとめたとされ、知的所有権は株式会社経済変動総研が引き継いでいます。

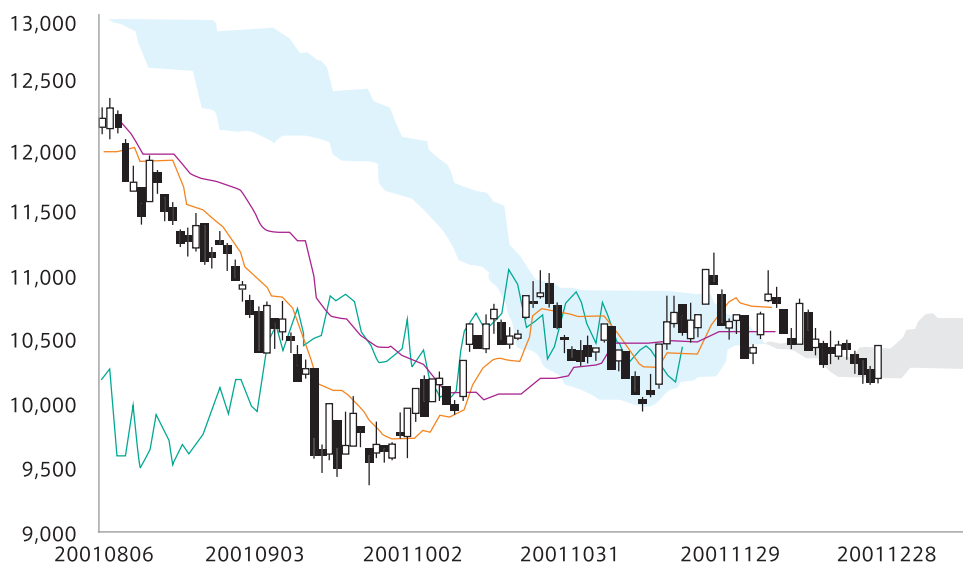
過去の最高値と最安値から転換線と基準線を計算し、基準線が中期トレンドを、転換線が短期トレンドを示唆します。基準線と転換線が共に上昇していれば上昇トレンド、共に下落していれば下降トレンドにあると判断します。転換線が基準線を上回れば相場が上昇基調に転じ、転換線が基準線を下回れば相場が下落基調に転じる予兆となります。

同様に、過去の最高値と最安値を元に計算した値をチャートの将来の位置に記入して先行スパン1、先行スパン2とします。両者に挟まれた部分を雲と称し、雲が価格よりも下であれば価格の下値支持帯となり、雲が価格より上であれば価格の上値抵抗帯となるとされます。

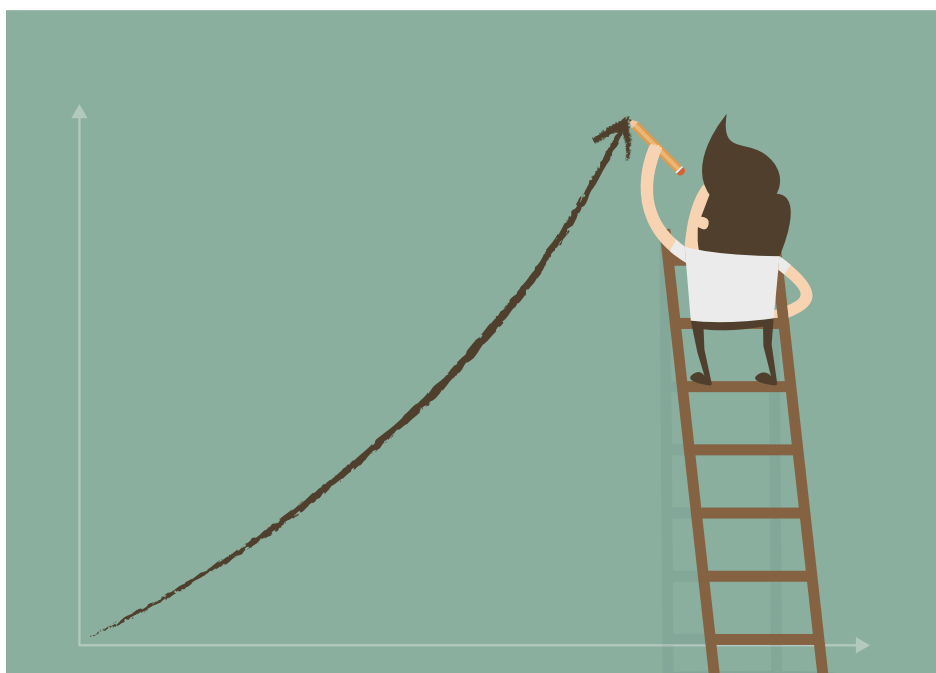
また、当日の終値を過去の位置に書き込んだ線を遅行スパンといい、遅行スパンが過去の価格を上回れば強気転換、下回れば弱気転換とされます。

この他、将来相場が転換しやすい日柄を計算したり、上昇や下落の値幅目途を探る計算値など、大きな理論体

系となっています。現在では海外でも人気が広がり、世界的に利用者が増えつつあります。



日経平均の一目均衡表



終わりに

本小冊子は、資産運用と関連の深いテクニカル分析を知っていただき、学んでいただく1つのきっかけになればと思い書かれたものです。

資産運用の要諦は、安く買って高く売ることですが、どこが安くどこが高いかを判断するのは、極めて難しい問題です。特に運用期間が1年か5年か、それとももっと長いのか、期間の取り方によって価格水準のとりえ方も変わってきます。

その際に知っておきたいのが、ファンダメンタル分析とテクニカル分析という手段があるということです。すべては学ぶことから始まります。NISA(小額投資非課税制度)は、それを実践する場です。

相場の世界は、アノマリー(科学的に説明のできない事象、相場の世界では経験則を指すことが多い)が多くありますが、過去の経験も大切なことです。あまり欲張らずに一步一步前進して行ってください。

テクニカル分析の普及啓発を目的として本小冊子は書かれています。ご質問は当協会へご遠慮なくどうぞ。

Conclusion

テクニカル分析を勉強したい方へ

当協会の資格制度は、国際テクニカルアナリスト連盟(IFTA、International Federation of Technical Analysis)の資格制度に基づいています。

NTAA認定テクニカルアナリスト

CMTA®(Certified Member of the Nippon Technical Analysts Association)。

誰でも挑戦できる初級レベルで、テクニカル分析に関する基本的な知識及び使用方法を学びます。約半年の通信教育の後、試験によって習熟度が判定されます。NTAAの資格です。

IFTA認定テクニカルアナリスト

CFTe®(Certified Financial Technician)。

CMTA®取得者を対象とした中級レベルで、テクニカル分析を用いた適切な現状分析と投資判断の仕方を学び、マーケット・レポートが作成できることが求められます。約半年の通信教育の後、試験によって習熟度が判定されます。日本語で受験できる国際資格です。

IFTA検定テクニカルアナリスト

MFTA®(Master of Financial Technical Analysis)。

CFTe®取得者を対象とした最上級レベルで、テクニカル分析に関する新たな手法、視点について論じた英語の論文を提出し、審査されます。国際資格です。



皆さん、通信教育講座を受けて、
資格試験にチャレンジしましょう。

発行済みのハンドブック

はじめの一歩

テクニカル分析 ハンドブック(基礎編)

本小冊子は、資産運用に際しての「テクニカル分析」の導入部分を分かりやすく説明することを目的にしています。

したがって、すでに投資経験の豊富な方やテクニカル分析について知識のある方には“物足りない”小冊子です。

さらに奥深く学ぼうとする方は、当協会通信教育講座のほか、様々な参考文献が出版されておりますので、積極的に学んでいただきたいと思います。



はじめの一步

テクニカル分析 ハンドブック2(初級編①)

本小冊子は、前号「はじめの一步 テクニカル分析 ハンドブック(基礎編)」に続いて一步進め、テクニカル分析とは何かについて、さわりの部分のお話をします。

テクニカル分析には様々な手法がありますが、ここではローソク足、トレンドライン、移動平均線の3つについてご紹介します。

ローソク足は、日本で考案された価格記録法で、始値・高値・安値・終値の4本値だけを記録しているにもかかわらず、その時々相場状況を示唆してくれます。現在では世界中で利用されています。

トレンドラインと移動平均線は、価格推移の大きな傾向、すなわちトレンドを知るための手法です。このような分析手法をトレンド分析といいます。トレンド分析は、かなり古くから使われていたようですが、広く普及したのは、ここ半世紀のことです。

本書をご覧になることにより、投資家が何を考えてテクニカル分析を考案したのか、テクニカル分析とはどういうものかについて、興味を持っていただくきっかけとなれば幸いです。私たち日本テクニカルアナリスト協会が推進している「テクニカル分析」は、皆さんの資産運用の一助になることを確信しています。

MEMO

MEMO

はじめの一步 テクニカル分析ハンドブック3(初級編②)

2017年4月1日 初版第1刷発行

非売品

発行所 特定非営利活動法人 日本テクニカルアナリスト協会

〒103-0026 東京都中央区日本橋兜町3-3

TEL 03-5847-2231 FAX 03-5847-2232

URL <http://www.ntaa.or.jp/>

E-mail office@ntaa.or.jp

編集人 古城鶴也

発行人 戸部俊紀

デザイン 杉野寿一

印刷所 株式会社 港北スピード印刷製本

本誌掲載記事の無断転載・複製を禁じます。

